

うきたむ

第21号

2003. 5. 1

山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館館報

山形県東置賜郡高島町大字安久津2117 TEL0238-52-2585

FAX0238-52-4665

<http://www.pref.yamagata.jp/ky/shakai/222600/top.htm>



▲米沢市台の上遺跡の土器

モノの力

考古資料館学芸員

竹田純子

平成14年度から始まった学校5日制によって、学校における授業時間は減少しました。この影響を受けてか、当館を授業の一環で利用してくださる学校も減っています。多くの情報を簡単に手に入れることが出来る時代ではありますが、児童や生徒にとつて、周辺の遺跡を知りそこから出土したモノに触れる機会、すなわち「地域の歴史を学ぶチャンス」は失われつつあるようです。

モノの力は実に大きく、資料館の展示品はさまざまな情報を提供してくれます。多くの人は縄目や渦巻き模様が付いた立派な土器を見たとき、美しいと感じるでしょう。しかし土器には造形美だけでなく、土器を作った人・使った人の様々な痕跡も残っているのです。

資料館では、体験教室や実際に資料に触れる機会を通して、展示を見るだけでは分からない昔の人々の思いを伝えたいと考えています。モノとの対話から児童・生徒達がヒトとその歴史を感じ取ってくれば幸いです。

新たな飛躍へ

今年で11年目をむかえるわたしたちの「県立考古資料館」。地域に根ざしたフレッシュな資料館として多くの方々から注目されてきた。10年を一つのくぎりとして、また新たな一歩を踏み出すことになる。今年も清新な企画で、多くの方々の来館をお待ちしている。新たな飛躍へむけて、大きく第一歩を踏み出した今年の企画は 一。

第11回企画展は

「古志田東遺跡展」



▲整備進行中の古志田東遺跡

敷のまわりは、ぐるっと川がめぐり、舟着場や橋もかけられていた。時期は平安時代の九世紀後半から一〇世紀初めと考えられる。

この重要性から二〇〇〇年に国の史跡となり、翌年から史跡公園として整備されることになった。そして今年の夏、これがほぼ完成をみる。城下町米沢に古

代の名所が一つお目見えすることになった。

これを機会に、出土した遺物を展示し、この時代の状況がわかるビジュアルな展示で、秋の企画展を開催することになった。「源氏物語」や「枕草子」の時代、さらびやかな貴族文化が展開した都の京都に対して、草深い東北の一角では、次の時代への幕開けが始まっていた。

なお開期中に、この遺跡と時代に関する講演会とシンポジウムも開かれる予定である。

みる・きく・ふれる遺跡の旅

新潟の博物館と史跡めぐり

「三内丸山遺跡」から始まつたみる・きく・ふれる遺跡の旅は、今年で七年目。今回は六月二十八日・二十九日に新潟県を巡る予定である。

うきたむ考古の会と本館の共催で、毎年会員同士の絆を深め好評をえている。新潟へは村上から入り、中条町の江上館や歴史のやかたをゆつくり見学する。

その後、長岡市にある県立歴史博物館、柏崎市立博物館、良寛の資料館や史跡などを見学する。

それに先立って、六月一日は春の遺跡めぐりで、天童市を訪

れる予定。

また秋の遺跡めぐりは、大江町・朝日町の史跡や資料館をまわることになっている。いずれもマイクロボス一台なので、早く申し込まれるようにされたい。思い出をつくるいい旅になるよう期待したい。

縄文まつりも

新しい趣向で

「縄文月見のうたげ」として仲秋の名月をめぐるつどいで始まった「縄文まつり」も、年々盛大になり、今や数百名の参加でにぎわう行事となった。

これは歴史公園管理組合や八幡神社保存会、町観光協会など多くの団体が実行委員会をつくって運営にあたっている。

一日中の行事になり、昨年は昼に体験教室や大道芸などがあり、屋台の店なども立つ。

夕方からメインイベントの縄文食の試食、縄文太鼓の演奏などがあって、縄文時代さながらに焚火を囲んでみんなで踊る。

少しずつ改善しながら、縄文人の心にかえり、人びとの原点に戻って原始のおおらかさをしのぶ、そのようなまつりをこれからもつづけていきたい。

冬の古代食まつりも、ひきつづき行い、いまの食生活を見直していきつけかけになればと思



▲昨年の縄文まつり

授業 etc 応援します！

学校教育との連携をめざして

新たな連携をめざして

いま学校教育は、少人数学級、総合学習の導入、週五日制の施行などにより、ゆとりと充実の新たなところみが行われつつある。この動きに対応するために、博物館・資料館は新しい役割をこなすようになっていかなければならない。

これまでも本館では、出前授業をはじめ体験学習、クラブ活動のお手伝いなど多くの小・中高生を受け入れて、「博学提携」をこころみしてきた。そして資料館で学んだことを、学校に帰ってから自分たちで計画をたて、実際にやってみることも行われている。

天童市立長岡小では、「縄文クッキー」をつくって全校児童を招待したり、山辺町立作谷沢小では、本館で学んだ体験教室をもとに、父母を招き縄文まつりを行っている。

わたしたちの館ではじめて実施した体験教室や古代食まつり、縄文まつりなどをモデルに、い

ま全県下にひろがりをもせつつある。

授業の強力な助っ人

本館では、今年度新たに館を利用して、社会科歴史の授業や総合学習、クラブ活動を応援する手引きを内陸部の各小中学校へ送った。

もちろん授業は、各学校の力リキユラムにそって行うものである。それを効果的に行い、学習の成果をあげるために、お手伝いすることがねらいである。

子供たちが教科書のみでなく、ほんものの土器や石器にふれ、体験学習や遺跡見学を通して、歴史を身近に感じ、新しい認識を獲得して、生きる力をみなぎらせることが期待される。

もちろん授業のみでなく、遠足やクラブ活動でもおおいに役立つようにしたい。また学校教育のみならず、P・T・Aや地域の生涯学習、公民館活動においても活用できるように、多彩なメニューを準備している。

多彩なメニューで

どのような体験が本館でできるか、いくつかの事例をあげよう。

- ・ 展示説明 時間に応じて、対話しながら説明する。
- ・ 歴史公園散策 古墳や縄文の竪穴式住居、古代の水田など説明を聞きながら散策する。



▲館長から説明を聞く児童たち

- ・ 近隣の遺跡案内 安久津八幡古墳、洞窟遺跡などをガイドする。

- ・ 縄文・古代の体験 勾玉づくり、弓矢づくり、土器づくり、縄文の編みもの、火起こしなどが体験できる。

- ・ 焼きものづくり 隣接する「創造のやかた」で、やきものづくりに挑戦できる。

- これらのメニューは、いくつかが組合わせて実施することもできる。午前中から一日中楽しんで学ぶことができるよう、多くの方々の来館をお待ちしている。

考古学セミナーは 八〇九月開催

企画展にちなんで、今年の考古学セミナーは、「平安時代の歴史と考古」のテーマで開講される。八月十日から九月二十一日まで五回にわたって開かれる。

第一回 八月十日

「文字資料からみた平安時代」山形大助教授 三上喜孝氏。

第二回 八月二十四日

「平泉と出羽国」米沢女子短大助教授 吉田敬氏

第三回 八月三十一日

「窯業生産の展開」東北芸工大助教授 北野博司氏。

第四回 九月十四日

「墨書土器が意味するもの」東北芸工大講師 村木志伸氏。

第五回 九月二十一日

「平安仏教の考古学」本館 川崎利夫館長。

以上を予定しているが、本県の平安時代に、新たな知見がえられることが期待され、多くの方々の受講を望んでいる。

県内最古の窯跡

高安窯跡

犬の宮・猫の宮があり、その伝承が語り伝えられる高島町高安集落の東側の「寺前」は昭和の初め頃から瓦や土器が出る場所として知られていた。一九九六年に高島町教育委員会ではじめて発掘のメスを入れたが、一基の瓦や須恵器を焼成した窯跡を発見した。

この窯は、地下にトンネルのような窯体を掘りぬいた「アナ窯」である。斜面地に設けられ、下に焚き口があり、窯の本体が上方にむかって伸び、上に煙道がつく。灰原という製品をかき出して失敗品をすてたり灰がたまっていく場所と、焚き口の部分だけの調査であったため、窯のしくみはまだよくわかっていない。

しかし多くの瓦片や須恵器片が発掘された。瓦は布目瓦といわれるもので、表には縄をこわしたもよう、内側には細かい

布目のもようがある。須恵器は灰白色や灰黒色の硬い土器で、一二〇〇度以上の高温で焼成されたものである。ここからは蓋・坏くわい・高台坏・壺などの破片がみつかった。蓋のつまみが高くもり上がり、坏には下部に線がめぐり、蓋受けの痕があり、高台が高くふんばりが強いなど、これまで県内の窯跡ではみられない特色があった。

年代は七世紀末頃とみられ、今までは七世紀末頃の窯跡の中ではもっとも古い。ちなみに山形県で古代の窯が多く築かれたのは八世紀末から九世紀にかけてであった。

今年の八月には、これより集落よりの谷の入口にあるB地点で、東北芸術工科大学歴史遺産学科によって発掘調査が行われた。少くとも二基の地下式アナ窯が確認され、たくさん瓦や土器片が出土した。これは高島町教委で調査したA地点と同じ

年代であることも明らかになった。今年度も引きつづき発掘調査が行われる予定という。置賜最初の郡家「小郡山」の南に位置し、この役所に供給されたものであろう。これからの調査に期待したい。



▲トレンチからの須恵器出土状況

我が館の展示品⑪

おん だし い せき 押出遺跡の じゅうめん とつて つき ど き 獣面把手付土器

押出遺跡は、今から五五〇〇年前の縄文時代前期の遺跡で、高島町にある「たいようパン」工場の東側にあたる。屋代川と吉野川の合流点で、白竜湖からつづく低湿な地に営まれたムラの跡である。現在の関東地方に当たる地域との交流を示す遺物がいくつかが出土しているが、その中のひとつ、獣面把手付土器（じゅうめん とつて つき ど き）を紹介する。

動物の顔を思わせる造形が、まるで把手のように土器の口の部分に付いている。いったい何の動物を示しているのだろうか？ 突き出た鼻と鼻の穴が確認できた。縄文時代にすでに存在していたと言われるイノシシの顔にも見えてくる。土器の形は深鉢形であろう。細い粘土紐を張り付けて渦巻状や弧状の模様がつけられている。大きさは、最大幅6.5cm、厚さ1.0cm、獣面把手部

分の幅は2.0cmである。

このタイプの土器は、地元、東北地方では大変珍しい。押出遺跡と同時期にあたる縄文前期に関東地方でつくられた、諸磯（もろいそ）b式という型式名で呼ばれる土器なのである。直接的であれ間接的であれ、押出遺跡の人々に、遠く離れた関東地方の人々との交流があった事を物語る貴重な資料である。



▲押出遺跡の獣面把手付土器